



自力建設も半ばを過ぎて

住まい手について

住まい手は、そのほとんどを自分でつくった。大工が建前をして野地を振り、板金屋が屋根仕舞を済ました後は全て、鼻の穴まで真っ黒になりながら焼き板を張り、資格試験に見事合格し電気工事まで担った。冬が来て、しびれをさらした家族の意見を受け入れ、残りは住みながら働いた。漆喰を塗ったり、ベッドをつくったり。

引っ越しの日には内祝いにと音楽会も開いた。音楽が大好きな家族だけれど、音楽会を開いたのはこの一度だけ。けれども、この時のなんとも言えない音の響きは今でもすぐに思い出せるという。この家には天井がない。地元しろうの杉を使った登り梁と垂木がつくる三角、厚い杉板の床、地域固有の汎用の材が音に響えたのか。

ついこの間、濡れ縁が完成した。待ち焦がれた子供達は既に成長してしまって、うわの空かもしれない。けれど、庭の土と木の家をつなぐ橋が架かったことに、住まい手は安堵しているのだ。

庭に土を

土の色がちゃんと見えるように。木の家の構えは小さく、地味はなるべく柔らかく、風土と暮らす木の家を建てたい。全ての建築は、土の上に立っている。土地の上に建つと書くと、何故か土の匂いを感じ得ないが、土という風土の上に木の家はある。けれども、土に蓋をするように建築は大きく、ひび割れるほどに硬く大きな舗装が土を覆っている。

できるだけ土が顔をだすように建築は小さく構え、人や車が沈まない程度の硬さで、土に蓋をしないように柔らかく地被する。そんな家や町の方がいいと思う。その土地の土の顔、土の表情、土の色が見えた方がいい。地層という名の断面でしか土を見れないなんて、やっぱりなんか変だ。なんでもかんでもフラットにするから、覆いやすく、覆いたくなる。無論、斜めのまま、ガタガタのまま、柔らかいままの地面があったっていい。土地とは地面を表し、地面は土できている。

もっと、土地から始めよう。いやさ、土から考えよう。人という命の立脚点が土でないのは、ちょっと変だ。

建築について

二間角の正方形を斜め45°の角度で、一間ずつ重ねながら、いくらでも増やしていける平面である。重なりの中の三角は、そのまま外とすることもできるし、室内に取り込むこともできる。屋根を伏せる架構は、棟木を斜め45°の軸芯に通し、桁もそれに平行に走る。桁は、二間角の正方形の隅を渡るため、先程の外角の三角は軒下となり、豊かな半外部をつくる。

お母さんの仕事場である SOHO と、皆が集うダイニングキッチンを中心として、その両端に個室を配した。ニュートラルな平面のもとに、自由に暮らし方に合わせて用途を与えている。矩形の平面から切り離したような、ちょうど布の真ん中を持ち上げたように屋根を伏せたいと思った。

